
剣士で魔術師でたまに軍師な狐

ロア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣士で魔術師でたまに軍師な狐

【Nコード】

N8900Z

【作者名】

ロア

【あらすじ】

大好きな人がいた、今は許せない人がいる 幼馴染の命を奪った相手ともみ合いになり、真冬の夜に橋から転落した北村純。しかし次の瞬間には、人間ではなく狐の獣人の体に宿されて異世界に召喚されていた。魔法や魔物が存在する産業革命後の激動の近代ヨーロッパに似た異世界で、時代と世界の波に翻弄されながらも純は生きる。

プロローグ

大好きな人がいた、今は許せない人がいる　　彼はその許せない、許したくない相手に声をかけた。

「……………赤松吉宏」

赤松吉宏と呼ばれた男は、背後からいきなりフルネームで呼び捨てにされ、怪訝そうに振り返る。

振り返った先には、まったく見覚えの無い若い男が立っていた。眼鏡をかけた、日本のどこにでも溢れている凡庸そうな青年。

「誰だよ、お前……………何の用だ？」

赤松は露骨に不審そうな表情を浮かべたまま、青年を上から下へと眺めた。改めて見ても、紺色のスーツを着た普通の青年だ。就職活動中の大学生か、社会人新米にしか見えない。

青年は髪を派手な金色に染め、耳にはピアスをつけて、一般人が想像するであろう典型的な不良、もしくはそれに類する容貌の赤松に睨まれても、顔色ひとつ変えなかった。普通ならば、怯えるなりなんなり、何らかの反応を示してもいいはずなのに。

相手の様子を完全に無視して、青年は静かに口を開き、彼の幼馴染の名前を口にした。

赤松の反応はわかりやすかった。驚き、そして硬直している。

「そつだよ、忘れてるはずがないよね。君が殺した人の名前だから」

青年は表情をまったく変えないまま、そう言った。赤松の背筋に

震えが走ったのは、冬の海風に吹きつけられたただけではなく、その言葉に含まれた冷たさのせいだ。

「だ、誰だお前……どうしてそんなこと知ってるんだよ、畜生」

「別にそんなことはどうでもいいよ、ただ君と話がしたかったんだ」

赤松は目の前にいる青年が狂っているのではないかと思い、何か助けは無いかと周囲を見渡した。

真冬の夜の、河口に架かる大きな橋の上。歩道には電灯が明るく灯っているが、周囲に人影はまったくない。二車線の道路上は、時折車が通り過ぎていくが、歩道にいる二人には目もくれない。

相変わらず無表情の青年は、赤松の助けを求めるような視線の揺れがとまるのを待ち、それから続けた。

「君が殺した彼女は、僕の幼馴染だよ。それで本当に反省しているかどうか、話を聞きたくてね」

赤松は何も答えられなかった。ただ自分はずみで殺してしまった相手の、幼馴染だと名乗る相手の言うことを聞く。

「少年法っていいなあ、彼女はまだ何十年と生きたかもしれないのに、君は五年ちよつとで塀の中からこうして出て来てるわけだし」

そんな言葉がすらすらと青年の口から出て来る。赤松の頭にその言葉が入っていくと同時に、猛烈な怒りがわき上がって来た。

「うるせえ、てめーにそんなことを言われる筋合いはねえよ！」

陳腐な台詞とともに、相手の襟元を掴んだ。青年はされるがままだ。

「俺はな、もう罪を償ったんだよ！もう誰からも非難されるいわれはねえ！わかったかこの馬鹿野郎！」

飛び散る唾と怒声を顔に浴びながら、青年は良心の呵責も何もあつたものではないその叫びに、一言だけ応じた。

「……よかつた」

直後、赤松は脇腹に走つた痛みを仰け反つた。まるで火傷をした瞬間のような、猛烈な痛み。

赤松が視線を下げて痛みの根源を見ると、そこには青年の右手と黒いものが見えた。

「て、てめっ……！」

黒いものがナイフの柄で、刃は深く自分の脇腹に食い込んでいることを理解した瞬間、赤松は無我夢中で青年を押ししていた。必死で青年を押し離して、ナイフを抜こうとする。

電灯の灯りの下で、二人はもみ合う。押された青年の腰が橋の欄干にぶつかり、そして呆気なくそれを越えた。青年は、両手で赤松を掴んで放さなかつた。

そこからは、ただ単純に重力に従うだけだつた。橋の欄干を乗り越えた二人の体は、冷たい真冬の水面へと落ちていった。

遠のいていく橋の上の灯りを見ながら、彼はこれで本当によかつ

たのだろつかと自問自答していた 答えを出す前に、彼の意識は闇に沈んだ。

北村純きたむらじゆんが意識を取り戻して最初に考えたのは、自分は生きているのか、そしてここはどこなのかということだった。

純の目には、ここがどこかの地下室のように見える。煉瓦の天井と床、そして壁。薄暗くてよくわからないが、湿って陰気な空気はそこが地下室だと教えてくれているような気がした。

あの赤松にナイフを刺してもみ合いになり、真冬の河口へと転落したことまでの記憶はある。しかし、そこからこの目の前の状況へとまったく繋がらないので、とにかく純は混乱した。

「……………!?!」

今更ながら純は、自分が身動きひとつ出来ないことに気がついた。指一本動かせない。それどころか、声すら出すことができなかった。視点の高さや向きから、自分が立った姿勢でいることだけはわかったが、それがどうしたという話だ。

真正正銘の金縛りに自分が遭っていることに気づいた途端、パニックの波に巻き込まれた。必死で動こうとすることは明らかに意識が向き、まともな思考などあつという間に吹き飛んだ。

純が無駄な努力を重ねている間に、変化が起きた。壁際のランプのようなものからの灯りの陰で、何かが動いたからだった。純の視線がそこに釘づけになる。

「遂にやった……私は召喚に成功した」

しわがれた声が、純の耳に届いた。闇の一部が動いたと思ったら、そこから黒いローブを着込んだ相手が姿を現したのだ。

もし純に声を出すことが出来れば、きつと絶叫していたに違いない。純は金縛りという状況下で、相手のことを幽霊か何かとしか考えることができなかった。

「これは狐……？」

ようやく見えた相手の顔を見て、純は息をのんだ。浅黒い肌を持った女だ。しわが多く見えるから、年寄りだろうか。

召喚とか狐とか、意味のわからないことを呟いている相手が自分の近寄って来るのを見て、純は逃げ出そうと必死で手足を動かそうとするが、どうにもならない。

謎のローブを着た女が、純の眼前にまでやって来て、立ち止まる。

「でもこれからじっくりと調べていけば……まずは契約を」

やはり意味不明なことを呟いている相手がローブの内懐へと手をやり、そこから出て来たときには、その手には短剣が握られていた。ランプの薄明かりの下で、刃が鈍く光った。

殺される　純の中で、その思いだけが膨らんだ。得体の知れない女が刃物を手に迫ってきている、純としては殺されるとしか思えない。

こうなる前には、自分が相手にナイフを突き刺していたことなど、純の頭からは見事に欠落していた。

「や……めろ、近寄るなああ！」

純の口から声が迸り、次の瞬間には女が吹き飛んだ。見えない何かに腹を殴られたかのように、体を折り曲げて、本当に後ろへと勢いよく吹っ飛んだのだ。

「そんな、術をかけたのにつ……!?」

煉瓦の壁に叩きつけられた女は咳き込んだ後、信じられないと言わんばかりの様子でもらした。手近なランプがいつの間にか消え、さらに暗くなっている。

純にも何が起こったのかさっぱりわからない、声は出せたが相変わらず体は動かせないままだ。

「こうなったら多少傷つけて、大人しくさせてからでも」

自身に言い聞かせるように呟きながら、ふらりと女が立ち上がる。殺意というものが立ち昇っているように感じられて、純は恐怖のあまり頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

落とした短剣を拾い上げ、再び女がこちらへと迫った瞬間 何かを壊すような激しい物音がその場に響き渡り、女が背後の闇へと振り返る。

「どうしてここに……あがつ!？」

女の言葉が、そこで途切れた。純の耳が次にとらえたのは、何か大量の水が床に落ちたような、重く湿った音。純は嫌な予感しかない。

女がまた振り返って、自分へと両腕を突き出して、ふらつきながら近寄って来た。まるで映画のゾンビのような動きだった。

純は自分が悪趣味なホラー映画の被害者役にされていると思ひ、これが夢か何かであつて欲しいと切実に願つた。目を閉じればいいと思つたが、それすら出来なかつた。

そして純は見た。女のローブの肩から脇腹にかけてがぼつさりと裂かれ、その下の皮膚も同様で、どす黒い血が足元へと流れ出ているという現実を。

あまりの光景にもはや声すら出なくなっている純の目の前で、女の口が動き、それから一気に全身が燃え上がった。

人が燃えている、それを認識した瞬間、純は本当に狂いそうになつた。

燃えながら恨めしそうに両腕を突き出したまま、女が自分に近づいて来る。純は自分が何かを声の限り叫んだ気がしたが、目の前が真っ暗になつてそれ以上は何もわからなくなつた。

プロローグ（後書き）

こついう場で小説を公開するのは初めてなので、いろいろと至らな
いところだらけですが、これからよろしく願います。

ご意見やご感想をお待ちしています。

異世界召喚

意識を取り戻してから目を開けるまでが、とにかく怖かった。またあんなリアルで残酷な光景を見せつけられたら、今度こそ発狂してしまつと、本気で信じたからだった。

まずは手足が動くかどうかを確かめた。上に布か何かがかぶせられている感覚はあったが、普通に動いた。そして首も動かすことができた。どうやら横になっているようだ。

自分が金縛りに遭っていないことを確認してから、純は恐る恐る目を開けた。最初に見えたのは、木の板で構成された天井だった。地下室のあの陰気な臭いもこもっていない。

やはりびくびくとした動作で毛布をかけられていた上半身を起こし、周りを見た。それでやっと、純はある程度落ち着くことができた。

純が寝ていたのはベッドの上で、地下室などではない普通の部屋の中に自分がいることを知ったからだだった。

純がいるのは、お洒落でレトロな感じのする部屋だった。窓から射し込んでいる陽光が、とても暖かい。

天井と同じく床は木製だったが、壁は明るい白の煉瓦でつくられている。あまり大きくない部屋で、家具といえば純が寝ていたベッドの隣に小さな机と椅子、それから壁際に棚が二つ並んでいるだけだ。

もちろん一体どうしてこんな部屋にいるのだろつという疑念はあったが、なにしろついさつきまでかどうかは知らないが、とにかく意識を取り戻す前には死ぬような恐ろしい目に遭ったのだ。

それを考えれば、目の前の部屋のことなど、どうつということはない

い。

とはいえ、やはりここがどこなのか気になりはじめたところで、部屋の入口のドアが開いた。緊張が高まり、純はドアへと警戒する視線を向けた。

「よかった、気がついたんですね」

入って来たのは、優しそうな若い男の人だった。優しそうというのは、全身を見ての感想だ。

背は高くも低くもなく、すらりとした体をゆったりとした紺色の着物で包んでいた。前に朝のドラマで見た、昭和時代の落ち着いた大人そのものだった。

あの狂った女はローブに浅黒い肌というとんでも具合だったが、多少古い感じがしても目の前の男性は、日本人にしか見えない。それに何より、穏やかな表情を浮かべた相手と話せるのは、今の自分にとって願っても無いことだと思えたのだった。

「あ、はい……あの、何かお世話になっているようで、ありがとうございます」

「いえいえ、気にしなくても大丈夫ですよ。そちらこそ大変な目に遭ったようですし」

ベッドの上でぺこりと頭を下げた純に対して、男の人は手を振り微笑しながら答える。

そのまま歩いて来ると、ベッドの隣の机の横に置かれていた椅子に腰を下ろした。

「そうなんです、まるで意味がわからなくて……ここはどこですか、あなたは？」

とりあえず相手はなんとなく年長者のように感じたので、丁寧な対応をするように心がけて尋ねた。

「まあ、まずはお互いの自己紹介からにしましょう。私の名前は、菊池貞則きくひひだのじといいます」

「菊池さん、ですか……自分は北村純です」

純が名乗ると、菊池は驚いたようだった。すぐに純に尋ねて来る。

「北村さんは、私と同じ皇国の出身ですか？」

皇国、と言われてすぐに何のことかわからなかった。こうこう、広告、公国、皇国と頭の中でようやく正解と思われる変換に辿り着いたところで、応じる。

「ええと、天皇が治める国という意味の皇国ですよね？」

「そうですよ」

「あ、なら日本のことですよ、それならそうです」

随分と古風な言い方をするんだなあ……と純は思ったものだ。怪訝な顔をした菊池が何かを言う前に、さらに純は質問した。

「出身を聞くと、ここ日本じゃないんですか、外国だなんて言いませんよね？」

「ここは帝国ですが……」

帝国と言われて、純にはどこの国のことかさっぱりわからなかった。さっきまでは落ち着いていた心が、また不安に揺れ始める。

「そつだ、あの、自分どうしてここにいるんでしようか。自分、いきなり頭がおかしくなっているとしか思えない女の人に」

「少し待って下さい、順を追って話しましょう」

「は、はい」

勢いに任せて質問を浴びせまくろうとした純を、菊池は片手を上げて制した。

それで純も少しは落ち着き、とにかく事情を知っていきそうな菊池の話を待つ。

「北村さんはあのダークエルフの女とどういう関係だったのか、よろしければ教えて欲しいのですが」

「はあ、ダークエルフって何かの冗談でしょうか……よくわかりませんが、気がついたらいきなり目の前にいて、自分のことをナイフで刺そうとして来たんですよ、狂ってますよ。しかもいきなり燃えてしまったし、なんですかあれ？」

あの時の光景を思い出し、純はまた肝が冷えた。菊池のダークエルフとかいうファンタジックで珍妙な表現も、すぐに頭から消えた。

ふと純は思いついた。実はこれは全部、夢か何かなのではないかと。

あの赤松ともみ合って河口に落ちた自分は意識を失い、誰かに助けられたものの病院のベッドの上において、今も夢の世界か……さもなくば、あの世なのかも。

「いつ!？」

純は実に原始的な方法でとりあえず目をこすってみたが、その途端に目に激痛が走って涙が出てきた。

慌てて涙を拭おうとするとさらに痛くなり、結局泣くに任せるしかなかった。

目に何かちくちくしたものが刺さっている感じがしたが、涙を流しているうちに一緒に落ちたようで、ちよっとしてから目を開けることができた。

「大丈夫ですか、でもその手でいきなり目を強くこすったりするからですよ」

机の引き出しから出した薄い布で自分の目元を拭き、涙を拭ってくれた菊池がそんなことを言った。

自分の手は汚れていたのだろう、そう思って右手に視線を落とし自分は、絶句した。茶色の細かい毛に覆われた自分の手を見れば、人は誰しもそうなると思う。

「え、あれ？」

反射的に左手で自分の右手に生えているとしか思えない毛を撫でたが、その左手にも同じ茶色の毛が生えていた。袖をまくってみたが、まくったところまでの腕一面も同様だった。

そこで自分が菊池と同じ着物を着ていることに気がついたが、それどころではなかった。

着物から覗く自分の胸元を見れば、そこにもやはり皮膚は見えず、純白の毛並みだけが見える。

「どうしたんですか、北村さん……？」

「どうしたも何も、ほら、自分の体に動物みたいな毛が生えちゃってるんですよ、明らかにおかしいじゃないですか!？」

躍起になって体のあちこちを探って生えている毛並み、もはや動

物のそれとしか思えないものに触れながら、菊池に訴える。

「そう言われても、あなたは狐の獣人ではありませんか？」

引き出しから新たに出した手鏡を見せながら、菊池が不思議そうに言った。

そこには全身を覆う毛並みと、お尻にあったふわふわの尻尾に気づいて、ぽかんと口を開けた狐の顔がうつっていた。純はそれが自分の姿であると気づいた瞬間、気絶こそしなかったものの、また声の許す限り絶叫していた。

純は恥も外聞も無く、泣きながら菊池に訴えた。自分は人間だったこと、冬の夜に橋から落ちたこと、あの狂った女とのこと、そして今ここに人外としていること。

改めて話してみても、まったく理解不能な事態だった。

泣きながら話している最中、頭にある三角形の耳に触れてみたが、しっかりと触れた感覚があり、やはり鏡の中の狐が自分であることを認めざるを得なかった。

自分が人間ではなく、狐との合の子のような状態になってしまったというのは、純をパニックの只中に突き落とし、泣き喚かさせるだけの衝撃力があつた。

「そちらの事情はわかりました、しばらくここで待っていてください」

一通り話し終わると、菊池はそう言って部屋から出て行ってしまふ。部屋の外から話し声が聞こえるので、何やら誰かと相談してい

るようだ。

残された純はといえば、落ち着かずずっと狐の体をいじっては、本物だと実感して気を失いそうになるのを繰り返していた。

手鏡を見ても、明らかに恐慌状態とわかる狐の顔がうつるだけで、純は諦めて菊池が戻るのをただ待つだけにした。

「お待たせしました」

菊池がやっと戻って来た頃には、なんとか純も泣きやんでいた。

「あなたの話を魔法の専門家と検討してみました……落ち着いて聞いて下さいね」

「わ、わかりました」

目尻に残った涙をそっと拭ってから、菊池が一体何を言うのか待った。

「あなたは召喚されたんです、あなたのいた世界からこの世界へと」

純は呆然とした。そしてありえないと脳内で反射的に否定したが、すぐに考え直した。

今の今まで、召喚などというファンタジーなことにまったく考えが及んでいなかったが、確かに召喚という非現実要素がありえるならば、今のこの状況をすべて説明できるような気がしたのだ。

「一体誰が、何の目的で自分を……まさか」

「そうです、あなたが見た頭のおかしい女は、過去の禁じられた魔法に手を出して大きな被害を出し、指名手配されていたダークエル

フです」

召喚の次は、ダークエルフと来て、純はいよいよファンタジーが現実であることを認めなくてはならなくなってきた。

「ダークエルフって、あの耳が尖っていて魔法が上手なエルフの、悪い奴……?」

「大体それで合っていますね。この辺りでは魔女として知られたなかなか有名なダークエルフだったのですが、昨夜ついに居場所を突き止めまして」

どうにも嫌な予感がしたが、黙って菊池の話の続きを聞いた。

「居場所の地下で見つけたので、ぱつさりと斬ってしまったわけですが」

「え……いきなり、ですか?」

「大変危険な存在で手間取ったら何をするかわからないので、見つけ次第殺すようにと言われてましたから」

あつさりと菊池は答えた。

いきなり殺すというのもまた衝撃的だが、この穏やかな学者風の菊池が殺しをするような人だとは思えなかったので、そちらの方にも純はかなり衝撃を受けたが。

「それで一撃で深手は負わせたのですが、なんと自殺されてしまいました」

「あの、一気に全身燃えてしまった?」

「ですね、あつという間でした。それから地下室の奥を調べたところ、気を失っているあなたを見つけたというわけです」

とりあえず今の菊池の話であのひどいホラー映画じみた展開の経緯はわかった。

しかし、純が知りたいことはまだまだある。

「自分が召喚されたということについて、もっと詳しく話を聞きたいんですけど……」

「残った魔法陣や資料から、あの魔女がどうやらまたしても禁じられていた大昔の召喚魔法に手を出していたことがわかりました。そのこととあなたの話を関連付ければ、あなたが異世界から召喚された、という結論に辿り着くわけです」

純はもう納得するしかなかった。

人はあまりにも驚くべきことが連続すると、それに慣れて諦観の境地に達するらしいが、今の純がまさにその状態だった。

自分はこの狂ったダークエルフの女のせいだ、この異世界に召喚されたというのが現実のようだ。

「でもどうして人間じゃなくて、こんな狐の体に……元に戻す方法とか、無いんですか？」

「すみません、召喚魔法の重要な部分が記された本は魔女が持っていたようなのですが、一緒に燃えてしまったようで、詳細はまったくわからないんです」

最悪だ、と純は思った。

「もちろん調べは進めますが、なにしろ古代魔法の一種で謎が多過ぎるので、今のところはあなたが人間の体に戻る、あるいは元の世界に帰還する方法はない、と言わざるをえません」

どつちやら最悪の前に、最低という二語も付け加える必要が
ありそ
うだった。

異世界召喚（後書き）

ご意見やご感想をお待ちしています。

生きる

馬鹿な話といえはそうかも知れないが、純が幼稚園からずっと付き合いのあつた幼馴染を初恋の相手だつたと認識したのは、彼女が死んでからだつた。

忘れられないあの日は、高校三年生の冬だつた。希望する県内の大学に首尾よく合格し、入学まで何もすることがないという解放感を味わいながら、家でだらだらする毎日。

部屋でのんきに購入して来た軍事関連の書籍を読み漁っていたとき、部屋のドアがノックされた。

返事をして入室を促すと、両親が入つて来た。二人とも明らかに様子がおかしかった。緊張しきりで、自分にそのまま座っていると書いた。

まさか大学のことで、何かあつたのかな？

最初に考えたのは、それだつた。合格は間違いだつたとか、そういうこと。だとしたらとんでもないことで、両親が深刻な顔をするのもわかる。

「純、落ち着いて聞いて欲しい」

父がそう言って話した内容は、幼馴染が死んだというものだつた。純は信じられなかった。昨日、本屋で会ったばかりの彼女が、死んだと言われて、すぐに信じられるものか。

もちろん純が信じようが信じまいが、事実是不変ならない。彼女は買い物帰りに何者かに殺されたのだつた。

嘘だ、そんなのありえない。

最初に両親に対して言ったのは、それだった。それしか言えなかった。

テレビでも新聞でも、女子高生が白昼堂々、商店街という衆人環視の中で殺害されたことを大々的に報じていた。

不良が多いことで有名な地元の工業高校の三年生が犯人だったという事実も、話題性を上げて報道の過熱を促進させた。

純がどこか夢を見ているような気分のまま、あつという間に全ては進んで行った。蒼白な顔をしたまま、幼馴染の葬儀に出た。

葬儀の場でようやく現実感が襲いかかり、真つ青な顔で泣き出す自分を見て、彼女の両親が声をかけてくれた。娘と一番仲良くしてくれていたのは自分だと言って、一緒に泣いてくれた。

葬儀が終わり冬から春になる頃まで、ずっと純は死んだように生きていた。毎日何をするでもなく、ずっと部屋で考え込んでいた。

両親はカウンセラーを受けることを薦めたが、純は断り、考えつづけた。

その結果として、自分は死んでしまった彼女を本当に好きで好きでたまらなかったことに気がついた。

純は愕然として、それからとつともない喪失感に毎日悩まされた。小さい頃から一緒にいたから、恋愛対象というよりは家族のように思っていた。だから、中学でも高校でも、恋人同士という関係での付き合いはしなかった。

しかし純にとっては紛れもない初恋の相手だったのだ。もちろん、死んでしまった幼馴染もそうだったかどうかまでは、わかるはずも

ないが。

純は相変わらず死んだような有様だったが、とにかく大学に入学した。そして、とにかく勉強しまくった。

両親は自分が勉強に励んでいることを立ち直ったと考え、素直に喜んでいたが、そういうわけではなかった。勉強に集中していないと、彼女のことを考えて気が狂いそうになるからだった。

そんな日々を送っている間に、幼馴染を殺した犯人に対する判決が出た。懲役五年と少しだった。

犯人は幼馴染に無理に言いより、断られ続けた結果として、逆上してナイフで刺し殺したというが、深く反省しいまだ少年であることから更生の余地があることを考慮した結果の判決だそうだ。

ふざけるな！

テレビでその報道を見た瞬間、自室で純は叫んだ。

彼女はまだ何十年と生きたかもしれないのに、犯人の身勝手な理由で殺されたのに、その犯人はたったの五年ちよつとで罪を償い、生きていくことができるという。

純は、犯人を許せなかった。悲しみから怒りへと感情は切り替わった。

憎悪に任せて、純は犯人のことを調べ上げた。なにしろ地元で起きたことだ、友人知人を総動員して、犯人を特定した。

事件直後に工業高校の三年生でいなくなった人間を探せば、すぐにわかった。それが、赤松吉宏だった。

幼馴染の家族にも確認した。本当はいけないことだったが、どうしても我慢できなかった。

犯人が赤松吉宏で間違いないことを確認した後は、どうしようかまた悩んだ。

殺してやりたい、と考えるまでは簡単だったが、それはやはり人として一線を越えることだし、自分の人生を捨ててまでやるべきことなのかどうか、考えに考えた。

そうこうしている間に大学四年生になったが、成績は学科の中で一番だったので、あまり苦勞せずに大学の助けを得て、内定を獲得した。

就職してからもやはり仕事に励み続けたが、相変わらず悩み続けていた。

それから赤松が出所したことを知り、様子を見に行った。

赤松の家族は引越していたが、それも聞き込みで知っていたので、新たな自宅を確認した。

赤松は家族に甘えて、出所後もだらしない生活を送っていた。毎日遊び呆けていたのだ。親が金持ちであることを、純は本気で憎んだ。

ここで赤松が本当に更生していれば、純はきっと復讐などという不毛な考えを捨て去ったに違いない。

しかし、赤松は更生していなかった。だから、どうしても純は許せなかった。決意をかためた。

そして赤松が歓楽街で遊び歩いた帰り、あの冬の夜に、声をかけたのだ。もちろん懐にはナイフを忍ばせて。

ここでも、もしも赤松が事件のことを反省し、何か純に謝罪するようなことでもあれば、純は赤松にナイフを刺したりしなかった。

ただどあの糞野郎は、何の更生もしていなかった。だから、

刺した。

確かな手ごたえを感じたところで、赤松が自分に掴みかかり、そのままもみ合って橋から落ちた。

純は目を覚ました。また前の世界での陰鬱な回想をする夢を見たことに辟易としながらも、ベッドから起き上がる。

すぐ横の手が届く机の上の刀掛けにある短い刀、脇差を紺色の着物の腰に差して、それから部屋を出た。

「おはようございます、師匠」

「おはようございます、純」

部屋から出ると、純は菊池とそう朝の挨拶を交わした。早速、菊池と一緒に朝食を準備する。

「今日はいい天気ですから、まずはシーツを干しましょう」

「はい、師匠」

朝食を食べながらそんなやりとりを交わす。

食べ終わると、純は早速ベッドのシーツを回収して、外に出た。途端に爽やかな空気が全身を包み込み、暖かい風が茶色い毛並みを優しく撫でた。

前を見ればかなり先の森まで続く緑でいっぱい草原が、後ろを見れば天に連なっているような高い山脈の峰々が並んでいる。

空はどこまでも青く澄み渡り、ところどころに千切れ雲が浮かんでいる。

大自然の春を満喫しながら、純は狐のふんわりとした尻尾を上機嫌といった様子で揺らしつつ、家のあるちよつとした丘を下り、その横を流れている川へと向かった。

先端に雪を抱く高山からの雪解け水が流れる豊かな川で、早速シートを洗う。水がとても冷たかったが、気持ちよかった。

シートの洗濯を終えると、絞ったそれを持ってまた家に戻った。煉瓦造りの菊池の一軒家だが、すでに半年以上住んでいるので、我が家という気持ちがある。

家の横の風通しのよい場所に設けられた、木製の物干し台にシートを干す。風にシートがゆらゆらと揺れる。

最初は自分の抜け毛のせいで汚れるのではないかと心配したが、本物の狐ほど抜け毛はひどくなく、獣人というだけあって人間として生活をするうえであまり不便はなく、それは純にとって救いのひとつとなった。

「師匠、シートを干し終えました」

「ご苦労様です」

家の中に戻って報告すると、そう返事が返って来た。

「今日は魔物狩りに行きますか、グーロを狙いましょう」

「本当ですか、師匠。やりがいがあります」

菊池から脇差よりも長い、主力となる刀を受け取って腰に差しながら、純は嬉しそうに答えた。

剣術を教わるようになってから半年が過ぎているが、それまではひたすら菊池に痛めつけられながら稽古を受けていただけだったので、魔物が相手の実戦と言われるとやはり俄然やる気が出る。

「では行きましょう」

「はい、師匠！」

元気よく答えて、外に出た。先程シーツを洗った川沿いに、草原の先にある魔物の住処である森へと向かって歩く。

こうして菊池と歩いていると、これが当たり前のような気がする。しかし今でも時折、自分が異世界にいて、しかも人間ではなく狐の獣人という、二次元でしかありえなかった状況に陥っているのもまた、信じられなくなるが。

この世界に召喚されてしまった以上、ここで生きていくほかなく、純は剣術の達人らしい菊池から生きるためにいろいろと教えを受けているのだ。

その関係で菊池を師匠と呼ぶようにされたのだが、最初はすでに二〇を超えている身でそう呼ぶのが恥ずかしかった。そのことを素直に菊池に言ったところ、生徒が教師を先生と呼ぶのと違いはありませんよ、常識ですと言われるに至極納得したものだ。

とにかく菊池にはこの世界のことをたくさん教えて貰っているの
で、まさに恩人だ。社会のことはもちろん、言葉は通じるが文字は
わからなかったたので、それも座学で習っている。

春の景色を楽しみながら歩いているうちに、森の入口へとやって
来た。

ここでは魔物、いわゆるモンスターが出る。なんともファンタジ
ーなことだが、魔法も存在するのだから、今更純は驚く気にもなれ
ない。

純も菊池も特に身構えることなく、森に入っていく。

森に入っすぐ、ぎゃあぎゃあという奇怪な叫び声とともに、しわくちやになり吹き出物だらけの緑色の皮膚に覆われた醜悪な小人が、棍棒を振り回しながら襲いかかって来た。

RPGなどではお馴染みのいわゆるゴブリンというやつだった。

純は左腰に差した鞘から刀を抜くなり、襲いかかって来た先頭のゴブリンの頭を、躊躇なく刎ね飛ばす。切断面から盛大に鮮血をまき散らしながら、頭を永遠に失ったゴブリンの体が数歩進んだ後、雑草の上に転がった。

二体目も上半身と下半身を斬り分け、三体目も首に刃を刺し込んで殺す。ゴブリン五体の遺骸がたちまち量産されたが、純も菊池も気にも留めない。

ゴブリンは棍棒を使ったりするくせに、いまだに純や菊池が自分達よりも強い敵であるということを学ぼうとしない。

最初はこんな雑魚でも、恐ろしく苦労したよなあ。

そう思い、はじめてゴブリンに遭遇したときの自分の慌てぶりが懐かしくなった。

なにしろゲームでは序盤の雑魚に過ぎなかったが、リアルとなる話は別だ。自分を殴り殺そうと棍棒を手に凶悪なゴブリンが駆け寄って来たときには、本当に心臓がとまるかと思った。

もちろん冷静に対処すれば、やはりゲームと同じく雑魚でしかないと学んだ後は、このようにどうということもなくなったが。

襲いかかる魔物を斬り捨てながら、昼でも薄暗い森の中の探索を進める。子供の頃なら、幽霊が出るとかそういう妄想をしただろうが、幽霊どころか魔物が出るので冗談ではない。

菊池は基本、手出しをしない。助言は口にするが、純が危なくな

ったときか、自分に襲いかかって来た魔物に対処するとき以外には、刀を抜こうとしない。

そうやって進んでいると、遂にお目当ての魔物　　グーロを見つけた。

グーロは、大型犬の体に山猫の頭をくっつけたような外見の魔物だ。とにかく何でも喰らう貪欲な魔物で、今も仕留めたらしい牛に似た大きな魔物を貪り食っていた。

純に気がつくと、唸り声を上げて起き上がり、警戒姿勢に移る。そのまま前方を行ったり来たりを繰り返して、純の様子をうかがっている。

純は片膝をついて踵の上にしやがみ込み、姿勢を低く保つ。左手は刃の収まった鞘を握り、じっと痺れを切らしたグーロが襲いかかって来る瞬間を待つ。

しばらくすると遂に我慢しきれなくなったグーロが跳び上がって襲いかかって来た。このまま押し倒して牙で引き裂くか、前脚を振るって純の首の骨をへし折る気だ。

大型の凶暴な肉食魔物が、咆哮しながら跳びかかって来る様は、常人ならば正気を失って逃げ出させる迫力を持っていたが、純を揺るがせることはできなかった。

間合いに入ったことを確信した純は、抜刀しながらこちらも跳び上がり、次の瞬間に刃をグーロの首に一閃させた。

空中で純とグーロがすれ違うが、着地と同時にどちらが勝者が判明した。

純は着地すると刀を素早くグーロに向け直したが、グーロは頭から地面に落下し、そのまま動かなかった。

地面に伏せたまま動かなくなったグーロの首は半分近く斬られ、そこからどくどくと血が流れ出ている。

「見事です、血抜きの手間も省けますね」

「ありがとうございます、師匠」

菊池の褒め言葉に内心では結構喜びながら、純は刀を鞘に収めた。

生きる（後書き）

新年あけましておめでとうございませう、今年最初の投稿になりました。

そして新年早々ですが、友人からタイトルがとっつきにくいとお叱りを頂いてしまったので、改題としました。

まだまだ始まったばかりですが、これからも本作をどうぞよろしく願います。

ご意見やご感想をお待ちしています。

町に行く

グーロを倒して引き揚げた翌日、純と菊池は町に行くことにした。理由は、仕留めたグーロを売るためだ。

身支度を整えると、家を出て昨日の森とは逆方向、つまり高い山々が連なっている方へと草原の中の道に沿って向かう。

道といっても、人ひとり分の幅だけ腰の上まである草が踏み分けられ、地面が見えやすくなっているようなものだ。

アスファルトで舗装された道歩くことに慣れた現代人であった純としては、最初は道は道でも獣道ではないかと思っただ。

新緑の香りを胸いっぱい吸いながら、草原の中の一本道を延々と歩いていく。子供の頃、空き地の背の丈以上の草をかき分け、冒険気分に進んだことが思い起こされた。

どこか懐かしく清々しい気分で歩き続けていると、やがて草原が途切れた。

その先は目的地である町　　ヴィーゼシュタットだ。単純にヴィーゼと呼ぶことが多い。

町の周囲の草が刈り取られているのは、敵を丸見えにし忍び寄りられないようにするためだ。

さらに町は広場を中心として、円形に建物が配置されているが、その背の部分を町の外側に向けて、隙間なく繋げている。つまり家の壁を城壁のようにしているのだ。

家の屋上には常に見張りが立てられ、接近してくる相手がいればすぐに報告が行くようになっていいる。

常に襲撃に備えているなんて、平和な日本では考えられない光景だよな。

城壁をつくるほどの規模ではないヴィーゼのような町であっても、外敵からの防衛が第一に考えられているというのは、平和な日本で生きていた純にとっては何度見ても感心するしかない光景だ。

こういった努力のおかげで、草原を行動範囲とする夜行性の魔物から町は守られ、安全な場所となっている。

「やあ、どうもキクチさん。今日は何を持って来てくれたんですか？」

建物の壁の繋がりが途切れている部分には門が設けられ、そこにいた門番が笑顔で尋ねて来た。

菊池はもちろんだが、純もすでに一年近くここにいるわけで、何度もこの町には来ているから、すでに門番に菊池の弟子として覚えられていた。

門番といっても中世の鎧姿ではなく、普通の洋服を着て、腰にサベルを吊っている人だ。

刀剣類だけでなく銃もあるし、最初に純が想像したような中世ヨーロッパではないことは、大分前からわかっている。

門番が普通の人間と違うところは、頭には犬の耳、お尻にもやはり犬の尻尾があるところ。つまりこちらの方は、この世界では割とポピュラーな半獣人である。

「昨日、純がグーロを仕留めましてね、それを売りに来ましたよ」「それはすごい、ジユン君も腕を上げましたねえ。さすがは我々の祖先といったところですか」

普通、獣人とはこの門番のような獣耳に獣尻尾が付いた、いわゆる半獣人を指す。

純のような動物の頭に全身に体毛が生えている本当の意味での獣人というのは、今では希少で絶滅危惧種のような扱いを受けているらしい。

最初の獣人というのは純と同じタイプばかりだったらしいが、人間との長い付き合いの歴史の中で、次第に今のよう半獣人ばかりになっていったとのこと。

そのため半獣人の方々からすれば、純はご先祖様のような位置になるらしいが、別に崇められるわけでもなんでもない。

本当の獣人は基となった動物の特性を濃く受け継いで身体能力も高いとのことだが、純としてはより人間に近い半獣人の方がよかった。

そういえば、菊池からは普通の人間を相手に本気で喧嘩をするようなことは絶対に避けるようにと言われた。

なんでも自分が本気で普通の人間を殴る蹴るしたら、手足の骨は折れ関節は破壊され、胴体なら内臓破裂、頭ともなれば頭蓋骨陥没は必至らしい。手足はともかく、他はほとんど致命傷だ。

半獣人も常人よりは身体能力が高いが、純のような本物の獣人となるとその倍以上の力を持っていると説明された。

それじゃ真正銘の化け物みたいじゃないですか……でも師匠はそんな自分と普通にやりとりしていますよね？

腕っ節が強いのはこんな物騒な世界で生きるうえでは心強いとはいえ、自分がまさしく人外になってしまったことを嘆きつつ、疑問に思ったことを菊池に尋ねてみた。

なにしろ菊池はそんな化け物級の力を持つ自分を余裕で打ち負かして、普通に剣術の稽古をつけている。菊池の話が本当なら、対等にやりあえるはずがないのだが。

ああ、私は鬼の血が入ってますからね、力だけならあなた以上ですよ。そんな返事がさらりと返って来たときは、純は言葉を失ったものだ。

鬼と言われて真つ先に純が思い浮かべたのは、昔話で桃太郎に退治されたりする金棒を持った赤や青や黄色のカラフルな巨人だ。

まあ、そういうものもいるにはいますが、と菊池にその話は笑われてしまったが、鬼にもいろいろあるらしい。菊池がそういう野蛮な方でなくてよかった、と純は思った。

菊池はここからずっと東のこの世界での日本にあたる島国、皇国の出身らしいが、その鬼の力を持って余して旅に出て、前の世界ではヨーロッパに相当する位置の一國、ここ帝国に辿り着いたらしい。

だから鬼の血が入り剣術の達人で人外の力を持つ菊池相手ならば遠慮する必要は無いが、殺し合い以外で一般人を相手にするときには、手加減をするようにと厳命され、その訓練も菊池から受ける羽目になった。

「どうしました、純。開きましたよ」

「あ、すいません、今行きます！」

考え事をしている間に、門番が町の門を開けてくれていたので、急いで純は菊池の後を追った。

ちなみに門はこことは反対側にもうひとつある。万が一ここが使えなくなっただけの場合に、出入りが困難になるからだ。

門をくぐり、左右の建物を抜ければ、そこはもう広場だ。広場にはいくつか出店や屋台が並び、あれこれ販売している。

ここは人口が三桁に届くか届かないかの町というよりは小さな集落に近いが、それでも昼間の今はあちこちで住人が活動している。

特徴的なのは、住人のほとんどが半獣人ということだ。ここは帝国の中でも最西端の方で、一部の国々から迫害を受けた半獣人が逃げのび、集まって始めた町らしい。

帝国ではそういった差別は現在では無く、この辺りでしか採れない高価な薬となる高山植物や希少な高山動物の毛皮、それから山羊や羊を飼ったりして生活をしている。

「いらつしゃいませ！」

「こんにちは、イリスさん」

出店のひとつで店番をしている白い猫耳、猫尻尾の女の子に純は挨拶をした。

イリスはこの町で薬草などを扱っている商店の看板娘だ。瞳が大きく笑顔が眩しい可愛い女の子で、商店の売り上げ向上にかなり貢献している。

「ジュンさん、今日はお買い物？」

「いや、グーロを昨日やつつけたから、それを売りに来たんだ」

純がイリスと話している間、菊池は懐から文庫本のようなものを取り出していた。そのページをめくり、一番新しいところで手を止めた。

「グーロ」

菊池が一言そう言うと、足元が一瞬光に包まれ、それが消えるとそこには昨日仕留めたグーロが横たわっていた。

「師匠、それ本当に便利ですね」

「まったくです、古代魔法というのは偉大なものですよ」

菊池が持っている本は魔本という、何やらそのまんまな名前のよ
うな気もする書物の一種だ。この魔本は失われた古代魔法の遺産の
ひとつで、非常に貴重なものだ。

なにしろ家の一軒や二軒分の家財が余裕で収まる、特殊な収納系
魔本である。しかも中に仕舞った物品は劣化したりしないとは、驚
異的だ。

使い方は簡単、仕舞いたい物を選んでその名前を唱えて、魔本を
手に仕舞えと願うだけ。するとそれは魔本が持つ別の空間へと転送
され、本の中に仕舞った物の名前が追加される。

出すときは出したい物の名前が記されたページを開き、それを出
したいことを願って、名前を唱えるだけ。恐ろしく便利。

こんな物をぼんぼん生み出して使っていた古代文明は相当なもの
だが、大昔に滅んでしまったので、今ではこの魔本も世界に数える
ほどしか残っていないという。

そんな貴重な魔本をどうして菊池が持っているのだろうかと思っ
たが、深く詮索しないことにした。大事なものは、今ここにあって、
それが使えるということだ。

僕をここに引きずり込んだのも古代の召喚魔法だったというか
ら、まったく。

純が呆れとも感心ともつかない感慨を覚えている間に、イリスと菊池との商談は進んでいるようだった。

「大物ですね、ここは思い切った値段で買い取らせてもらいます！」
「それはよかったです」

グーロは太い毛は衣類や帽子などに使え、ひずめなどが目や耳に効く薬をつくることができ、商品価値が高い魔物だ。

ただし見た目通り非常に凶暴なので、下手をしたら即座に胃袋行きにされてしまうが。

「それでは、お金はこちらに」

どうやら無事に商談は成立し、イリスはグーロを、菊池はお金を受け取っている。

「あ、よかったら自分が運ぶの手伝いま」

「俺が運ぶの手伝うよ、イリス！」

イリスが大きなグーロを運ぶのに苦労しているのを見て、純が手伝いを申し出ようとしたが、割り込んで来た別の大声に邪魔され、最後まで言うことはできなかった。

純は少しむっとしたが、声の主を確認すると納得した。

「ありがとう、ライン」

「いいよいいよ、こんなの楽勝さ！」

グーロを余裕といった様子で運んでいるのは、ラインという名の犬の半獣人の青年だ。いかにも元気いっぱい、野を毎日駆けまわっているような快活さをいつも周囲に振りまいている。

ラインはイリスの商店の隣の道具屋、その息子であり、イリスとは小さい頃からの幼馴染。そういう関係に水を差すのは愚か者のやることなので、純はさっさと引き下がり、別の屋台の商品を眺めたりしている。

「師匠、もう帰るんですか？」

「まだ帰りませんよ、今日は大事な用がシーファさんにありますからね」

シーファはこの町に住む唯一のエルフだ。何やら高名な魔法の専門家らしいが、どうしてこんな田舎というか、辺境の町にいるのが、いまいちよくわからない。

広場を抜けて大きな焦げ茶色の煉瓦造りの家へと向かう。ドアをノックして、菊池が中に声をかけた。

「菊池です。入りますよ、シーファさん」

菊池とシーファは仲がいらしく、勝手知ったるなんとやらといった様子で、菊池は家の中に入っていく。

純もお邪魔しますと言ってから、菊池に続いて家の中に入った。

「うっ……!!」

家の中に入った途端、アルコールの強烈な臭気に襲われた。狐の敏感な鼻が悲鳴を上げ、思わず純は仰け反る。

シーファさん、こんな真昼間から飲み過ぎだ。やっぱり絶対

アル中だよ！

シーファはとんでもない酒豪で毎日酒ばかり飲んでるのは知っているが、家の中がここまでひどいとは思わなかった。

そういえば、前に会ったときも口からアルコールの臭いがしていた。

「書庫でしょうか、いるとしたら」

そう言っつて菊池は、本棚から溢れた大量の本と紙で悲惨なことになる。入った。

案の定、シーファは奥にある机の上で酒瓶を抱えて居眠りしている。

「シーファさん、起きてください。菊池です」

「うー……なんだ、キクチか」

菊池が揺ると、ようやくシーファは重たそうに瞼を開け、エメラルド色の瞳を見せた。

エルフといわれると、なんとなく創作の影響で若々しい美男美女のイメージがあるが、シーファはただの中年男なので、純は自分の抱いていた勝手な想像を見事に粉碎されたものだ。

ただ瞳は本当に白く、尖った耳を持っているので、この辺りはイメージ通りだった。もっとも今は酒に酔っているせいか、白い肌も内から赤くなっていたが。

「何の用だ、キクチ。せつかく俺が酒を飲んで気持ちよく寝ていたというのに」

「今日来ると言っていたではありませんか。まさか忘れたのではな

いでしょうね？」

「さあて、なんだったかなあ……」

菊池の話にもいい加減な受け答えをし、赤ら顔の顎に生えた無精ひげを手でこすりながら考え込んでいるシーファは、どこからどう見ても飲んだくれの駄目な中年オヤジだ。

だ、大丈夫かな、このおっさん……？

高名なエルフの魔術師をしておっさん呼ばわりはまずい気もしたが、こんなだらしない有様を見せられると、ついそんなことを思ってしまう。

そもそもシーファとか、なんとなく綺麗な名前なのに、全然似合っていないとか、そんなことも考えてしまう。

「おお、そうだった。その狐小僧に俺が魔法を教えるんだったな

」！

「はっ？」

このだらしなさのせいで、魔術師として成功していないんじゃないかな、とか相変わらず失礼なことを考えていた純だったが、いきなりのその言葉に間の抜けた声を出し、狐の口をぽかんと上下に開いたまま硬直してしまった。

町に行く(後書き)

ご意見やご感想をお待ちしています。

魔法特訓

「というわけで、魔法にも種類がある。何があったか、答えてみる」
「あ、はい……ええと」

シーファが教えた魔法の種類を頭の中に思い浮かべながら、一体どうしてこんなことになったんだろうと純は考えた。

あの衝撃発言の後、自分には魔法の才能があるから鍛えた方がいいだろうといったことを言われ、魔法の専門家であるシーファに任せるということになり、さっさと菊池は帰ってしまった。

どうも最初から決まっていたことらしいが、いきなりのことに純はついていけず、そうこうしているうちに椅子に座らされ、シーファから魔法の講義を受ける羽目になってしまった。

「まずは属性魔法ですよね」

「基本となる四大属性は？」

「火、風、水、土です」

「正解だな」

属性魔法とは、まさにその名の通りの魔法だ。

ゲームでもお馴染みの火を放つたり、風で相手を吹き飛ばしたり、巨大な水鉄砲を喰らわせたり、地面を引き裂いたり、その属性に応じた効果を発揮する魔法である。

「四大属性に対応する別の属性がさらにあつたな」

「火に金、風に雷、水に氷、土に森です」

四大属性にはそれぞれ相性のよい属性がさらにあり、純が今言っ

た通りだ。

金というのはそのままの意味のゴールドではなく、金属のことだ。金属を加工したりするときに役立ち、昔は武器を用意するうえで欠かせない魔法だったとか。

雷は強力な攻撃魔法だが、わかりやすくいえば電気だ。腕のいい魔術師のを受けたら、相手は一撃で黒焦げの感電死間違い無し、ということらしい。

氷もわかりやすい。氷柱を飛ばして相手を串刺しにしたり、さらに氷漬けにしたりと、攻撃魔法として使うとなかなか残酷な魔法だ。

森は要するに植物全般のことで、果物や野菜の成長を促したりする平和的利用法がある一方で、薫で相手を縛ったり毒の花粉を飛ばしたりと、使い手次第だ。

「よし、念のためにもう一度言っておくが、四大属性とそれらの二つしか普通は使えないからな」

この辺り純も理解するのが難しかったのだが、扱える属性魔法は個人でそれぞれ決まっているものらしい。

たとえば火を扱える人は、他の三つの四大属性魔法をまったく使えない。ただ才能と魔力に恵まれ、努力を怠らなければ金属も習得できる。

他の属性も同様で、相性のいい属性魔法をもうひとつ習得することはできるが、その他の属性を習得することは無理だという。

純としてはどんな属性も使えると思っていたので、少しがっかりしたが、そうしたらシーファに怒られた。

普通は四大属性魔法のひとつしか覚えられず、相性のいいものま

で習得できれば、魔術師としては上級に入るらしい。

ちなみにシーファは、水と氷を扱えるとのこと。実際にグラスに水を注ぎ、氷を投入して純に出してくれたので、間違いは無い。

「属性魔法に関してはきちんと理解したようだな。他の魔法も言うてみる」

「はい、白魔法と黒魔法があります」

「それらの違いは？」

「白魔法は回復や防護などの有益な効果を与え、黒魔法は混乱や麻痺などの有害な効果を与える魔法です」

属性魔法とは別に習得できるのが、白魔法と黒魔法のふたつである。

純が今言った通りで、白魔法は怪我を治したりバリアを張って攻撃を防いだりと、対象に有益な効果をもたらす。

黒魔法は白魔法とは逆に、相手を錯乱状態に陥らせたり麻痺させたりと、いわゆるバッドステータスを発生させる魔法だ。

これもまた両方の習得は難しいらしい。大抵はどちらか一方に偏る。

しかも属性魔法を習得してしまっていると、こちらにまで手が回らなくなる場合がほとんどだとか。

ふたつの属性魔法を習得し、白魔法も黒魔法も扱えれば、最高最強の魔術師といえるらしい。

なんとシーファは白魔法も黒魔法もある程度使えるらしい、高名というのは嘘ではなかったということだ。

なおさらこんな辺境にいる理由がわからないが、やはり純は深く

詮索するのはやめておいた。親しき仲にも礼儀ありというのに、特別親しくも無い相手に立ち入ったことを聞くのは、無礼というものだ。

「昔の呪術なんか黒魔法に含まれるからな」

「自分を呼び出した古代の召喚魔法とか、師匠が持ってた収納の魔本とか、そういうのはどういう扱いになるんですか？」

少し気になったことを純は尋ねてみた。

「ああいうのは全部、古代魔法でひとくりにされてる。最近はず跡の発掘なんかで古代魔法の詳しいことがわかったりして、話題になってるがな。俺からすりゃ、古代魔法は人には過ぎた魔法さ」

古代魔法はやり過ぎとシーファは言いたいらしい。

確かにいきなり別世界の人間を獣人の体に突っ込んだうえに強制的に召喚したりと、かなり乱暴なところもあるので、なんとなく純にも理解出来る話だ。

「次だ。魔法を使うには魔力がいるが、それを持っているのはどういう連中だ？」

「えっと、大雑把に言うと普通の人間以外です」

ここが純の一番驚いたところだが、なんと普通の人間は魔力を持たず、魔法を一切使えないというのだ。

魔力があるのは人間以外の獣人やエルフといった亜人、それに一部の魔物や魔族だけらしい。

ちなみに魔力というのは、ほとんど体力と同じものらしい。

乱用すればたちまち枯渇し、疲れ切って動けなくなり、最悪の場

合には死に至る可能性もあるとのこと。つまり過労死と同じ感じだ。もちろんじつくり休めばそれに応じて回復するので、死人が出たりするのは大抵が魔法を乱用せざるをえない戦場でのことと教えてもらったが。

「魔法ってなんでも出来ると思ってたのに、本当に制約多いんですね……」

「当たり前だ、この無知め。だから人間は今、一生懸命に科学と技術を発展させているんだろうが」

尻尾を垂らして言ったら、即座にシーファに罵倒されてしまった。シーファの口の悪さにはうんざりだが、言っていることは納得できたので、純は我慢する。

確かに普通の人間が魔法を使えないのであれば、科学技術を発展させるに決まっている。

極端な話、戦争をするのだったら一部の者しか使えない魔法よりも、誰もが使える刃物や銃器といった武器を量産して持たせ、全体の戦力を向上させた方が勝ちだ。

質は量に勝るといえるのは名言だが、大抵は量が質に勝るのが現実だったりする。

「まあ、座って教えられることはこれぐらいだな。何にも知らなかった割には物覚えが早い、生徒としちゃ優秀な方だ」

「えーと、なんというか、ありがとうございます」

一応褒められたと受け取って、純はそう答えた。

何も知らなかったというよりは、ゲームである程度のイメージなどがあつたから、割とすんなり覚えられただけなのだが、それをシーファに言っても仕方が無い。

そういえば、純が異世界から召喚されたことを知っているのは、このシーファと菊池だけだ。

他人に話を広めるとろくなことにはならないから、基本的には他人には言わないようにと釘を刺されていた。

「なんだ、もう夕方か。実際にお前の魔法を発動させてみるのは、明日からだな」

「あ、なら自分は夜になる前に帰りますね」

「何を言っただ、しばらくは俺の家に泊り込んで、魔法の特訓だぞ」

「ええ!?!」

「安心しろ、数日に一度は帰らせてやるし、必要な物があればキクチが届けてくれる」

そ、そういう問題じゃなくて……この家に泊まるのが、いやいやそもそもこれスパルタ式の予感しかしないんですけど！

こんなアルコール地獄の家に泊らせられたうえに、スパルタ式で魔法の特訓を受けるのは冗談ではないというのが純の本音だったが、もはやどうしようもなかった。

結局シーファの酒臭い家に泊まる羽目になった翌日、町の外に純はいた。隣には当然、シーファも立っている。

「やる前にお前がどんな魔法に向いているか、話してやろう」

自分が使える魔法が何か教えて貰えると言われて、期待しないは

ずがない。純は想像を膨らませながら次の言葉を待った。

「まあ、その、なんだ……あまり落ち込むなよ、お前が使えるのはたぶん風属性の魔法だ」

なんでそんな気の毒そうに言うんだろう、風属性の魔法ってそんなに悪いのかな？

純が不思議そうな顔をしたからだろう、相変わらず気の毒そうな様子でシーファが説明した。

「風は四属性の中で、一番攻撃魔法として劣っているし、汎用性も低いんだぞ」

「いやでも、風をこっ……刃みたいにして、相手を切り裂くとか、そういう」

「そんなことは無理だ。風にできるのは、相手を吹き飛ばすぐらいだな」

「ちよつと……空気大砲みたいなことしかできないんですか、本当に？」

「今までの事例からすると、そうなんだなあ」

純は素直に落ち込んだ。自分が使える魔法が相手を吹き飛ばすぐらいにしか使えないと言われたら、誰だってそうなるだろう。

話を聞けば、攻撃魔法として優れているのは、相手を焼き殺したりできる火で、次いで地を引き裂きそれに相手を巻き込んで倒すようなことができる土が来る。しかも土は土木工事とか、そういうたことにも応用ができる。

水は攻撃魔法としては、やはり風と同じ程度の効果しか発揮できないが、しかし無から綺麗な水を生み出すというのは大きいことら

しい。軍では飲み水の確保に最適と歓迎されているし、普通に暮らす分にも使えれば便利ということだそうだ。

ところが風は攻撃魔法として使った場合、せいぜい相手を吹き飛ばすぐらいしかできないのでやはり威力に劣るし、風をちよつと吹かせたからといって、何かに役立つわけでもない。

純が言ったようにかまいたちのように使えたり、竜巻でも発生させられれば違ったかもしれないが、そんなことは不可能らしい。

ということと属性魔法の中でも特に使い道が無いとされて毛嫌いされているそうだ。散々な扱いである。

「あー……それなら、白魔法か黒魔法はどうですか？」

属性魔法が駄目ならばそっちはどうだと思ったのだが、あっさりとしーファに首を振られた。

「……向いてないな、うん」

「あの、どうしてそんなことわかるんですか、やってみないとわからないかも」

「お前が召喚されたとき、俺も菊池と一緒にいたからな。その時にちゃんと調べて、もうわかってたんだよ」

そう言われてしまったのは、純は何も言うことはできない。

「なんとというか、一気にやる気が……」

「とりあえず元気出せ、風でも使えないよりはずっといいぞ。お前は幸いにして、魔力はそんじょそこの魔術師よりずっとたくさん持ってる」

そんな風に言われたところで、やはりやる気というものは出ない。純としては、大金は持っているが、それは大して役に立たないものしか買ってはいけなと言われてたような気分だ。宝の持ち腐れもいいところと言うほかない。

「それにな、雷を使えるようになれば、一気に強くなれる。雷の威力は俺が保証する、あいつはすごい」

「そっか、そうですね、それがありませんよ。雷か、使えるようになればいいなあ」

風と相性いい雷のことをすっかり失念していた。使えるようになるまでが大変らしいが、雷が使えるようになれば、攻撃魔法としては最強クラスだ。

どう考えてもポケットに入りそうにないモンスターが主役のアニメの、電気鼠ばりの大活躍が見込めるかもしれない。

俄然やる気が出て来た。純はなんだかんだで、単純な奴ということに間違いない。

「よし、やる気が出たところで、早速やってみるか」

「はい！」

町の外の何も無い草原だから、ここでなら遠慮なく魔法を使える。早速、純は魔法の練習を試みたくなった。

「それで、一体どうやったら属性魔法は使えるんですか？」

「簡単だ。自分がその属性魔法を使う想像を頭の中でして、それを実行したいと願い、発動の合図として手を振ったりすればいい。そうすれば、その通りに魔法が使える」

「あれ、呪文唱えたりとか、そういうことはしないんですか？」

「なんでそんな面倒なことをする必要があるんだ、この方が簡単でいいだろう。そういうのが必要なのは、白魔法や黒魔法だ」

ずいぶんと魔法の種類や用法に制限があつた割には、いい加減な発動の仕方だと思つた。漠然とし過ぎていて、いまいちよくわからない。

しかし呪文の詠唱が必要無いとは、確かに楽でいいなと思つた。魔法を発動するのが一瞬ともなれば、戦いの際にはさぞかし便利なことだろう。

「わかりました、やってみます」

とりあえず純は頭の中で自分が風魔法を発動させ、突風を吹かせるイメージをした。

「はっ！」

それから思い切つて気合を入れ、手を素早く振つた。

「おお、気持ちいいそよ風が吹いたな」

「……なんか想像したのと、全然違います」

確かに風は吹いたが、頬を撫でるような優しい風で、自分がやったのかどうかすらわからないという弱さだった。

腹が立つた純は、先程よりもすごい強風を吹き荒ばせる想像をして、もっと素早く手を振つてみた。

「これでどうだっ！うわぁ！？」

その瞬間、前方数メートルに渡って生えていた雑草がまとめて突風で吹き飛んでしまった。想像したものより今度は威力が高過ぎる、やり過ぎだ。

「しかも疲れた……」

短距離を全力疾走した直後のような感じで、一瞬で息があがってしまった。これではとても使えたものではない。

「わはは、最初はみんなそんなもんだ。ひたすら地道に繰り返して、安定して魔法を発動させられるようになるまで、とにかく頑張るんだな」

いつの間にか懐から取り出した小さな酒瓶から強い酒を飲みながら、シーファが大笑いして言った。

くそっ、こうなったら風でもなんでもいいから、意地でも使いこなしてやる！

純は自分の頑固な性格に火をつけられたことを自覚しながら、再び頭の中で自分が風の魔法を使う想像をしばじめた。

魔法特訓（後書き）

ご意見やご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8900z/>

剣士で魔術師でたまに軍師な狐

2012年1月9日22時53分発行